

老人クラブ激減 会員ピークの2割

高齢者が集う場となっている「老人クラブ」が激減している。県内では1994年に1400を超す組織が活動していたが、現在は500組織に。ピークの85年に7万6千人いた会員も、1万5千人余りまで落ち込んだ。会員の高齢化や、年を重ねても働く人が増えたことなどが要因とみられるが、組織の活性化を模索する動きも出てきている。

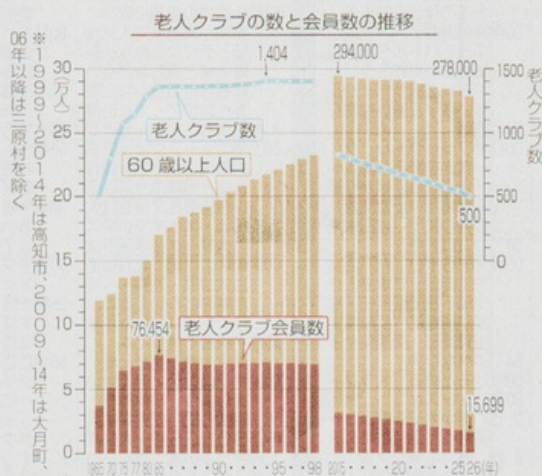
「イチ、ニ、サン、シ」8月下旬、高知市五台山の東倉谷団地公民館で、「きりりクラブ」のメンバーが「いきいき百歳体操」に汗を流していた。

メンバーは全員女性で、この日は64～94歳の23人が集まった。老いと死を考える研修会や輪投げ遊び、昼食も。西内純子代表(80)は「みんなで楽しみながら元気になれる。顔を合わせて元気やと確認できるき、安心感も生まれる」と声を弾ませる。活動は週2回。2、3カ月に1回の外食も大きな楽しみだという。

老人クラブは、主に60歳以上の人が地域単位でつくる組織。ウォーキングやカラオケ、旅行、ボランティアな

ど、幅広い活動を行っている。なっているクラブもあり、県る。百歳体操などの受け皿にや市町村は「健康維持や生き

働く人増加■名称を敬遠



活性化策に「居酒屋」「料理」

がいくつかを通じて、介護予防や医療費抑制にもつながる。国や自治体の補助金もあり、県は25年度、各クラブに計68万円を支援。県や市町村

単位の連合会にも、計3667万円を補助した。

ただ近年、老人クラブは減少の一途だ。県連合会によると、1994年の1404組織が2026年には500組織に、会員数も約5分の1の1万5699人に減った。60歳以上の人口に対する加入率は5・6%まで落ち込んでい

る。県人口の約半数を占める高知市は、ピーク時の23組織1万3080人が82組織2726人と減り、加入率は県内最低の2・3%。市連合会の小寺雅夫会長(75)は「趣味が多様化し、『老人』という名前も嫌がられる。解散するクラブも多い。週1回活動する『あつたかクラブ』(高知市鴨田)の西岡知江会長(77)は、補助金の申請書類作成に苦慮している」とい、「年齢を考えると長くは続けられない。業務が大変で後をやる人がおらず、私が辞めたら解散するしかない」と吐露した。

老人クラブの減少は全国的な傾向だが、活性化を図る動きも出てきている。本山町では2018年、会員増と地域の活性化を狙い、連合会内に「居酒屋クラブ」を設立。月1回、町内9カ所の居酒屋、ビアガーデンを巡る。個別のクラブへの入会が参加の条件で、新たに15人ほどが清掃や花植えなどの活動に加わったという。

日高村の連合会は料理教室や子どもとの交流イベントを

(谷川剛章)